

題字 寺山 且中

色紙に書く 座右の銘

フォルカー・シユタンツェル

「知行浅薄」



フォルカー・シユタンツェル (Dr. Volker Sautzel)
駐日ドイツ連邦共和国大使。1948年クロンベルク生まれ。68年フランクフルト大学にて日本学、中国学、政治学を専攻。72-75年京都大学に留学。79年ドイツ連邦共和国外務省入省。80年ケルン大学哲学博士号取得。82-85年在日大使館政務・広報担当。以後、在ハンガリー、在南イエメン、在中国の大使館勤務や本省経済局、政務局長、政務総局長を歴任。04年駐中国大使、09年12月から駐日大使。京都大学時代に始めた合気道は一段。

私は1972年から合気道が続けており、合気道は私の人生の一部となっている。しかしながら、これは軽々しく申し上げる性格の話ではない。異文化の出身者であればなおさらである。繰り返し熟考し自問自答しなければならぬ事柄なのだ。

まず、武道に携わる者ならだれでもぶつからざるを得ない問題である。私は合気道を教えていたが、初心者や疲れた様子の教え子から「私も本当にいつかは出来るようになるのでしょうか」とよく問われたもの

だ。これは私自身、30年以上にわたり幾度となく自分に問いかけた問題でもある。そもそも大量破壊兵器の時代、無人偵察機で戦争が展開される時代、グローバル・テロリズムの時代にあつて、武道の技を使って闘えるという能力に、はたしてどのような意味があるのだろうか。さらに、武道の技とは現実に使うためのものではあり得ないし、そうであつてはならないとしても、もし私が使おうと思えば、使えるものだろうか、という問いは、はるかに重要だ。それに対して？ あらゆる敵に対して？ つい

数週間前につくばで見た師範のように効果的に使えるものだろうか？

天才とは、1%のひらめきと99%の努力である、という有名な言葉がある。これはつまり、基本的にだれでもどんなことでも学べるということだろうか？ となると、学校で通用している考え方がどこでも通用するとうわけだ。すなわち、数学の勉強であれ、ピアノの演奏であれ、一つのテーマに十分な時間とエネルギーをかければだれでもどんな分野でも何でも学べる、とい

う考え方だ。私たちは、子供を学校にやる
だけでなく、放課後や宿題が終わってから
も塾に通わせたり、サマースクールに通わ
せたり、大学入試に不合格となれば次回は

確実に合格できるよう、とにかくもつと勉
強させようとする。そんなとき、私たちは
この原則に則って行動している。そして、
この原則がどこでも通用するならば、むろ

知行 合一



ん武道にも当てはまるはずだ。

ただしここで、次の点をもう少し詳しく
見てみよう。これまでいかに多くの人が絵
画を学んできたことか。それに対して、ダ
ヴィンチやピカソといった人物は歴史上い
かに少ないことか。何十万人の人がバイオ
リンの演奏を学んでも、アンネンソフィ
ー・ムターはたった一人しかいない。日本
やドイツやその他の国の大学で、いかに多
くの学生が物理学を学ぼうと、アインシュ
タインはこれまでたった一人である。これ
は、ひらめきだけあっても、努力を積まな
ければ天才にはなれないが、ひらめきがな
い者の場合、99%の努力をしてもそれが残
り1%の必要なひらめきとってかわること
はない、ということなのだろう。最近見
た合気道関係のブログでは、米国で合気道
を学ぶ人たちが、はたしていつかは大先生
のように上手くなれるだろうか、という議
論をしていた。答えははっきりしていると思
う。絵を学ぶ学生がどんなに訓練を積ん
でもダヴィンチになれる可能性が低いのと
同じように、その可能性は残念ながら低い、
ということだ。

「人はなぜ絵や音楽を学ぶのか」という問いは、
「人はなぜ勉強するのか」という問いと、
本質的に同じことだ。

自分の生命が、学びうるあらゆる技の習得にかかっているという時代ではなくなった今日、武道の鍛錬に意義を見出すとすれば、武道本来の直接的な意義を超越して考えなければならぬだろう。実際に闘うことのない武道など、小林正樹の映画「切腹」にも出てくるが、所詮「畳の上の水練」なのだ。私たちは、武道の技を持つ本来の特徴が、人と人の関係にも当てはまることを理解する必要がある。技というものがいかにして決まるかに、人が人とどう接しているかの示唆が隠されている。すなわち、相手と向き合い、相手の動きと自分の動きがうまく合うことの大切さや、無限の忍耐力こそ第一の徳であることを見据えつつ、決着が一秒以内につくことに備える心の構えである。こうした構えは、「格闘」という発想とは無縁の人とごく平和的に接するときにも重要だ。何も一部の米国ベストセラー作家にありがちな、サムライの武術の「戦略」が経営や企業間の競争の成功に「役に立つ」などという話をしたのではない。そのような考え方は安易に過ぎよう。

武道の技は処方箋ではない。武道の技を習得するには、身体がこれを完全に身につけなければならないのと同様、格闘を超越

して考える場合、精神も武道の技も完全に身につけなければならないのだ。そう考えれば、永遠に「知行浅薄」であり続けることを受け入れられる。現代の武道家となるのを妨げるものではないのだから。